



ウィリアム・フォークナーの「勝利」：アレックの戦争

著者	谷口 義朗
雑誌名	英米文学英語学論集
巻	6
ページ	51-62
発行年	2017-03-18
その他のタイトル	Alec's War: William Faulkner's "Victory"
URL	http://hdl.handle.net/10112/11073

【研究論文】

ウィリアム・フォークナーの「勝利」——アレックの戦争

谷口義朗

「勝利」(“Victory”)は William Faulkner の『短篇集』(*Collected Stories of William Faulkner*; 1950) の“The Wasteland”と題された四番目のセクションに、第一次世界大戦を共通の舞台背景とする他の四作品とともに収められている。この作品が最初に発表されたのは作家の第一短篇集『これら十三編』(*These Thirteen*, 1931)においてで、それまでに文芸雑誌等に掲載されたことはなかった。執筆されたのがいつごろかははっきりしていない。1931年以前であることは間違いないが、フォークナーのいわゆる送付リストにも載っておらず、知られている限り書簡においても言及されていないのである。Skei は Blotner の、フォークナーはこの作品を 1931年よりずっと前、ヨーロッパ旅行から帰ってそれほど時間がたたないうちに書きはじめたのではないかという推測を取り上げ、プロットナーがその根拠を「勝利」の最後の場面、すなわち物乞い同然に落ちぶれた主人公 Alex Gray がロンドンの通りで通行人にマッチを売る場面と、1926年にフォークナーが英国から故郷の母親あてに書き送った手紙の内容の類似においてに言及している。(Skei 194, Blotner 1974, I: 692) 結局、シェイは、「勝利」の執筆時期についてはプロットナーの推測を紹介するにとどめて肯定も否定もしていないが、「勝利」という作品の萌芽がそのあたり、すなわち作家がロンドンで目にした光景におそらくあるだろうとはプロットナーに同意を示して言っている。(194)

「勝利」執筆、完成の時期については、したがって、確定的なことは言えないが、フォークナーは 1931年の春ころ、『これら十三編』を編むにあたって、もともと「勝利」の原稿の一部をなしていた“Crevasse”(「亀裂」)を切り離し、これを独立した作品としておそらく手を加えたうえで「勝利」とともに『これら十三編』に収めた(Skei 195)。「亀裂」を含むものの「勝利」は、短篇作品としては少々長すぎたのである。「勝利」、「亀裂」とも、後の『短篇集』に再録されることになる。シェイは、自分はこの「勝利」という作品を元来それほど評価していなかったが、徐々に見方が変わり、「現在ではフォークナーの最も優れた十二の短篇に『勝利』を含めるのにためらいはない」(195)と述べ、その著書 *Reading Faulkner's Best Short Stories* に収めて詳しく解説している。

「勝利」の評価については、今触れたシェイのように作家の最良の 12 短篇作品に含めるほど高く評価する者もいれば、たとえば Ferguson のように失敗作だとみなす意見もある。しかしシェイの場合はむしろ例外的で、今日に至るこの作品についての評価は概して高くない。ファーガソンは、彼が「勝利」を失敗作だとみなす理由の一つは「この作品があまりにも小説的な」(124)ことだと言っている。ファーガソンによれば、「勝利」という作品

は「もっと包括的な扱いを必要として」おり、たとえば「アレックが無邪気なスコットランド人の若者から、残酷な殺人者へ、そして陰気で冷酷な英国の将校の伝統を体現する紋切り型の人物へと変貌する、その変化に十分な動機が与えられていない」(121)。結局のところ、この話を十分に展開させるには「中編」程度の分量を必要とする。(124) シェイも、「勝利」は「豊かで、変化に富んだ作品であるが、しかしそれほど効率的に書かれていない (a rich, varied, but not too effective story)」(195) と言って、その高い評価にもかかわらず留保をつけている。「それほど効率的に書かれていない」というところが、ファーガソンが失敗作だという理由と重なっているように思われる。

しかしこの作品は、短篇という小さな枠のなかに主人公アレックの家族的背景と、軍隊と、戦後、彼が除隊した後におけるその生の転変を（といっても結末のアレックはまだ 27 歳であるが）、シェイのこぼしたかえれば、「効率的に書かれてはいない」かもしれないが、収めていると言える。そして、主人公の出自、家族的背景が具体的に書きこまれているという点が、『短篇集』の“Wasteland”の表題のもとに収められた、いわばそうした背景をもたない人物が躍動する他の作品とは異なる。また「具体的」といっても説明的 (expository) にはなく、またそこに作家の努力と工夫が見えるのだが、確かにアレックの行為に十分な動機が与えられていないと思える場合があること（たとえば彼が上官である特務曹長殺害に際して示す異常なほどの残忍さ）も否定できないが、しかし彼の転落していく姿には、これもまた紋切り型という批判はあるけれども、読者に痛切に迫ってくるものがある。

本作品の解釈上の問題は、ファーガソンの指摘するアレックの変貌ぶりの動機づけの不足とも関連して、シェイが言うように、なぜアレック・グレイが再び郷里へ帰ることができなかつたのかということ、そしてアレックは、あれほどまでに落ちぶれるのだから、テクストにおいて、その零落にどのような説明あるいは理由づけがなされているかということである。というのは、アレックの運命は戦後のヨーロッパというコンテキストのなかで決定されているのだが、それによっては十分に説明されていないからである。(196) この点が「勝利」を論じるうえでもっとも重要であろう。小論では、アレックの零落に至るその道筋が彼なりに必然的なものであったことを、可能な範囲でたどることとする。

アレックは、過去二百年間にわたり Scotland の Clydeside という造船業の町で船大工を生業としてきた一家に長男として生まれた。家族は祖父および両親、そして三人のきょうだいである。そうした背景が、アレックの英国陸軍入隊志願をめぐる Gray 家における話し合いの様子とともに第三セクションで語られている。第一セクションでは、戦後になってアレックが大陸の旧戦地をめぐる旅の様子が描かれ、第二セクションで彼の入隊後、間もない時の閲兵の場面がさかのぼって語られる。そしてさらにそこからフラッシュバックがなされて、第三セクションにおけるグレイ家の居間での話し合いに逆戻りするのである。以後、最終の第七セクションまで、第一、第二セクションでの話もその流れの中

に含みながら時間の流れに沿って話が進んでいくが、第三セクションでの記述をさらに詳しく述べると以下ようになる。——祖父の老アレック(Old Alec)、父マシュー(Matthew)もともに船大工であり、祖父は引退する年齢に近づき(68歳)、逆にアレックがその仕事につく年になっている。だがアレックは本格的に船大工の仕事始める前に、大陸で戦われている戦争(第一次世界大戦)に自らも参加しようとする。そのことをめぐって家族会議が始まるのだが、家業に誇りを持ち、一家の長男がそれを継ぐことを当然のことと考えている父親はイギリスの戦争はスコットランドには関係ないものとして——「船大工のグレイは、イギリスの戦争などに関わりはない」¹——反対する。これに対し祖父は、息子(アレックにとってはおじ)のSimonが戦争(おそらくボーア戦争[1899-1902][Townner and Carothers 239])で武勲を立て、ヴィクトリア十字勲章を受けたことを引きあいに出席して、「女王が必要とされるときに、そのお役に立たなかった者がグレイ家にいたか」(442)と息子マシューに反論し、孫アレックの希望をかなえてやろうとする。ちなみに、授かったその十字勲章はグレイ家の居間の戸棚に木箱に入れて大切に保管されている。祖父には、この戦争は長くは続かないという予断があり²、彼は概して戦争に行くということを重く受けとめていないようである。結局、祖父の主張が通ってアレックは戦争に出ることになる。

入隊したアレックは毎月故郷の両親に手紙を書き、両者の間で手紙のやり取りが始まるが、まもなくして、アレックからの手紙が約7か月間途絶えるということが起きる。実はアレックはこの間、懲罰部隊(penal battalion)というものに入れられていた。アレックの属する大隊(battalion)が、大佐による閲兵を受けた際にひげを剃っていないのを見咎められたことが発端だが、さらに特務曹長から上官に対する不服従を責められて懲罰を下されたのであった。約7か月の後、除隊を許されたアレックはもとの部隊に戻る。そしてその一員として戦場に赴き、戦いの混乱に紛れて自分を懲罰部隊送りにした特務曹長を銃剣で刺殺し(特務曹長も同じ部隊にまだ属していた)、さらにその顔を銃の台尻で打ちつぶすという行為におよぶ。生存者四名というこの激烈な戦闘において、部隊つき下士官はすべて死に、指揮官も負傷により任務遂行不能に陥る中でアレックが状況を取り仕切り、結果的に武勲を立てて女王から勲章(ribbon)を授かることになる。そのことを告げる手紙をアレックは、自らも負傷し入院していた病院から何か月か後、傷もだいぶよくなった頃には書き送り、故郷からは祖父の死、新しく生まれた妹の名前を知らせる返事が届く。そして傷もすっかり癒えたアレックは、将校になるための学校に行くことを決め、父親に知らせる。父親は「自分の生まれをごまかしてはいけない。お前は‘gentleman’ではなくて、スコットランドの船大工なのだ」(‘Never miscall your birth, Alec. You are not a gentleman. You are a Scottish shipwright.’)(447-48)と、アレックに思いとどませようと熟考の末に書いた手紙のなかで言うが、やがてアレックからは勲章と新しい将校用の制服を身に着けた写真が送られてくる。彼は家には帰らず(戦争は大陸で戦われていたが、将校になるための学校は英国にあったであろう)、休暇が来てもロンドンの将校たちのたまり場で過ごし、家族に休暇のことは知らせなかった。

アレックは 'subaltern' (大尉より下位の士官 [中尉・少尉]。後に 大尉 [captain] に昇進したのであろう) となるが、所属していた大隊 (battalion) が戦闘で指揮官や下士官の多くを失い、アレックも中隊 (company) を指揮することになる。自らの中隊をアレックは閲兵し、自分がされたのと同じように義務不履行であった兵士を見とがめ、その氏名を軍曹に書き取らせるというエピソードが挿入される。その後、指揮官として臨んだ戦闘でアレックは瀕死の重傷を負うものの再び軍功をたて二つ目の勲章を授かる。ガゼット紙 (英国政府官報) に載っていたのを見た誰かがそれを切り抜いて父親に送り、父親も今回は感状 (citation) を見ることになる。アレックの傷もやがて癒え、彼は再び戦場に出るが、今度はドイツ軍の毒ガス攻撃を受け再び入院する (このことは直接言及されていないが、入院先の医者とのやり取りから推測される)。そしてアレックの回復を待つことなく戦争は終わり、アレックは戦場に戻ることを期待しながら病院で終戦を迎える。

やがて退院を許可されたアレックは一度故郷に帰るが、そこにとどまって船大工の仕事を経ぐことはせず、ロンドンへ行く決心を父親に告げる。ロンドンには、軍隊で得た知己をとおして就職口が約束されていたのである。アレックは「戦功十字勲章・殊勲賞受章者アレックス・グレイ大尉」と印刷された名刺を作り、きちんとしたスーツにステッキ、ワックスで塗ら固めた口髭という風体で職場に通う。彼は貯金をしてしたが、それは大陸の旧戦地を訪ねるためだった。三年後にその機会は訪れ、彼は海峡を渡る。フランスの激戦地の跡を巡り、自らの行跡をたどった後ロンドンに戻ると、予想もしなかったことに職がなくなっていた。「ご時勢だ」(456) と上司に言われた。蓄えも底を突き、臨時雇いの職を転々とするが、それもやがてなくなり、アレックはロンドンの通りで通行人相手にマッチ売りをするまで落ちぶれる。それでもアレックはイギリス紳士たる服装だけは崩そうとしなかった。一着しかないスーツにたき火で熱した石でアイロンをかけ、口髭は石鹼で塗り固めて、ステッキを手放すことはなかった。そんな恰好で通行人にマッチを売っているアレックを、戦後カナダにわたって成功した戦友が目撃する。彼はアレックと同じくドイツ軍の毒ガス攻撃を受けて病院に入り、ベッドを並べて語り合った間柄だった。この時、彼は戦争が終わったらカナダにわたって小麦を栽培するという計画をアレックに話し、一緒に来るようさそっていた。その言葉どおり小麦栽培で成功し、富を手に入れてカナダから久しぶりに帰郷した旧友はアレックに声をかけるが、「おれにかまうな」といわれ、しかたなくその場を立ち去る。そしてしばらくして振り返って通行人にマッチを売る彼を見、「吐きそうだぜ」(464) とつぶやいて「勝利」という作品は幕を閉じる。

ところで船大工という仕事を継ぐことになっていたアレックが、なぜそもそも英国陸軍に志願することを考えたのであろうか。英国は 1914 年にドイツ・オーストリアとの戦いに参戦するが、それは後に第一次世界大戦と称されるヨーロッパ全体を巻き込む世界規模の戦争へと発展する。当時の英国には徴兵制度がなく、したがって志願兵が募られた (飯倉 41)。作者フォークナーもそうした事実を把握していただろうが、いずれにしてもアレックは徴兵されたのではなく、志願して入隊したということはテキストの記述から明らかであ

る。入隊を志願するアレックの思いに語り手が立ち入ることはないが、アレックが、父親のマシューがおそらく反対するのは承知で入隊の意志を告げたのには戦争に行くということについてのいくらかロマンチックな思いがあったかもしれない。故郷を離れて間もなく、家族あてに書き送った手紙の中で彼は「軍隊での生活は船を造るのとは違います」(443)と述べている。淡々とした調子ではあるが、ここにはそうした思いが軍隊生活の現実に出会って崩れ去ったということがたぶん示されているのだろう。アレックとしては、いずれ家業を継ぐにしてもその前に、今現に戦われている戦争を実際に体験しておきたいという、青年としての冒険心からの志願であったかもしれない。

しかしアレックは初めて戦った戦闘において思わぬ軍功をあげることになる。先にも述べたとおり、懲罰部隊から帰隊を許されたアレックは、もとの部隊の一員として戦場に赴き、生存者四名という激烈な戦闘において、上官たちがすべて死に、あるいは負傷により任務遂行不能に陥る中で状況を取り仕切り、結果的に武勲を立てることになったのである。この戦いの混乱に紛れて彼は、自分を懲罰部隊送りにした特務曹長を銃剣で刺殺し、さらにその顔を銃の台尻で打ちつぶすという必要以上と思える残酷な復讐に及んでいた。語り手は、戦後故郷に帰ったアレックについて「彼はすでにずっと前に、勇気のある人間などはいない、人が通りにぼっかり空いたマンホールにうっかり落ちてしまうように、誰でも、わけもわからずつい勇敢なことをやってしまうことがあるものだということを知っていた」(454)と言っている。すると、結果的に女王から勲章を授かることになった勇敢な行為も、さらに勇敢というのとは少し違うが特務曹長殺害に伴う残酷な行為も、戦場という状況の中で彼がつかないしてしまった偶然の行いということになる。それはしかし代々続く船大工の家の跡取りに期待される以上の行為であった。(Day 392) 偶然とは言え何が彼を上記のような行為に駆りたてたのかはわからない。しかし結局そのことが彼の進む道を狂わせることになる。将校への道を選んだ彼は戦場でさらに軍功を立て、二つ目の勲章を女王から授かるが、戦後は転落の道を辿らねばならなくなったのである。

アレックは船大工を継がせたいという父親の希望をどう受け取っていたか。またその希望に沿えなかったことをどう感じていたか。アレックは除隊後、故郷に帰って家業を継ぐことはできた。またロンドンでの仕事がなくなった時にも故郷に帰ろうと思えば帰れた。しかし帰らなかつた。帰って船大工の仕事を継ぐことはしなかつた。アレックは実はこの仕事を嫌い、軍隊に志願入隊することを家業から離れるためのよい機会だとみなしていたのであろうか。あるいは家業をつぐつもりであったのに、将校に昇進する機会を偶然、与えられて、そのつもりがなくなったということなのか。アレックは、故郷に帰って船大工の仕事を継いだ方がむしろいいと彼にとっても思えるであろう状況になった時にもそれを避けている。そのような彼の家業を継ぐことへの思いは、彼が入隊して間もなく行われた、彼の所属する部隊の指揮官による閲兵の場面にその一端を探ることができるかもしれない。

入隊後、間もないアレックは整列する部隊を閲兵する指揮官(大佐)にひげを剃って

ないことを見答められる。「どうして剃らないのだ」(439)と問いたです大佐にアレックは、「私はヒゲは剃りません。……まだひげを剃る年齢に達してないのであります」(439)と答える。閱兵の後、「どうして剃らなかったんだ。……おまえだって、あの朝、査閲があることは知ってたんだろう」と伍長に言われた時にも、また別なふうにそのことに言及された時にも「私はまだひげを剃る年齢に達していません」と繰り返し答えている(441)。これは閱兵の際の指揮官に対する弁解であり、その後の上官(伍長)に対する理由説明であるが、もちろん奇妙な、理由にもならない返答として受け取られる。読者にとってもなぜアレックがそのように答えるのか実際よくわからない。しかしこの言い訳はアレックに対する父親マシューの言葉とあわせて考えると理解できると梅垣昌子は言う。第3セクションで、アレックの英国陸軍入隊志願を巡って父親と祖父が対立するが、「女王が困った時に、グレイ家の者でそのために力を尽くさなかった者」(442)はいなかったという事実を持ち出して行かせてやれという祖父に対し、父マシューは戦争に行かず家業である船大工を継いでほしいという願いを込めてアレックに語りかける。家業に対する父の思いのこもった言葉でもあり、少し長くなるが引用してみよう。

“For two hundred years,” Matthew Gray said, “there’s never a day, except Sunday, has passed but there is a hull rising on Clyde or a hull going out of Clydemouth with a Gray-driven nail in it.” He looked at young Alec across his steel spectacles, his neck bowed. “And not excepting their godless Sabbath hammering and sawing either. Because if a hull could be built in a day, Grays could build it,” he added with dour pride. “And now, when you are big enough to go down to the yards with your grandadder and me and take a man’s place among men, to be trusted manlike with hammer and saw yersel.” (441)

父マシューの代々受け継がれてきた家業に対する誇りが強く感じられる言葉であるが、梅垣は、アレックの返答に関して言えば、この中の最後の一文が重要だと言う。つまりアレックの「私はまだひげを剃る年齢に達しておりません」という言葉は、父親の「お前もようやく大きくなって、お祖父さんやこのわしといっしょに造船所まで降りて行って(造船所へはグレイ一家の家から坂を下りていく。以上筆者)、一人前の男としてとんかちやのこぎりを任される年になったというのに」に呼応している。アレックの「まだひげを剃る年齢に達していない」という言葉は、今あげたアレックに向けて語られた父親の言葉に対する彼なりの言い訳だということである。どういうことか。

アレックは本当のところは、伝統を重んじる一家の体質をそのまま受け継いだ純真な少年だったのではないか。家業を誇りとする父親と、女王への献身を肯定的にとらえる祖父の間で引き裂かれながらも、心の奥底では父親の意に沿いたいと思いつつ、重

責を担う大人へと成長するまでの猶予期間として、出征したのではないか。アレックが故郷を離れてすぐに書き送った手紙の中で、おそらく淡々と“soldiering was different from building ships”(443)と報告している裏には、自分の決定に対する少なからぬ後悔の思いも交じっていたのではないかと考えられる。自分が大切にしたいと思っている伝統の重みに答えることができなかつたのは、自分がまだ大人になっていないからだ、という論理が、父親の期待に沿うことのできなかつた自分への唯一の言い訳であったとすれば、将校の前で頑なに繰り返した髭を剃らない理由も、全くの不可思議な反抗ではなくなってくる。(梅垣 12-13)

物乞いにまで落ちぶれても故郷に帰って船大工になろうとはしなかつたアレックであるが、本来は家業の伝統を大切に思う純朴な青年だったのではないかとことである。「兵隊は船大工とは違います」というアレックが故郷に書き送った手紙の中のことは、自分の決意に対する後悔の念をにじませているが、それは彼が戦争と結びつけたロマンチックな思いが現実によって裏切られたことによるものだとしても、その先に家業の船大工の仕事が見えていたということである。「私はひげを剃る年齢に達していません」という言葉は、軍隊に志願することによって父の願いに沿うことが出来なかつたことに対する自分へ向けた言い訳だったのであり、沿えなかつたのはまだ自分が大人になっていなかったからだという論理である。そう考えれば説明がつく。

しかしアレックにもやがてそのひげを剃るときがくる。懲罰部隊での七か月の刑期があけ、除隊を許されたアレックはもとの部隊に戻るが、その時に顔なじみの伍長に「特務曹長も代わったんでしょね」とたずねる。すると彼は「いや同じだよ」と答えてしばらくじっとアレックの顔を見つめ、やがて疑問が解けたように「今朝は剃ってるじゃないか」と彼に向かって言う(444)。この時にアレックは「私もひげを剃っていい年になりました」と答えている(444)。もとの部隊に戻った最初の朝に剃ったのか、懲罰部隊にいるときに剃るようになったのかはわからないが(もともと、いつまでも伸ばしたままにしておくこともできなかつただろう)、この時点ですでにアレックの後ろめたさ、父親の思いに応えられなかつたというアレックの後悔の念は一応、断ち切られていたとみなすことができる。懲罰部隊でのアレックの体験については何も触れられていないが、おそらくそこで課された厳しい教練に耐えながら、アレックはもう後には引けない、前に進むしかないという思いを強く感じたであろう。アレックのためらいを表わす無精ひげはこの時に剃られることになったと思われる。(ちなみに懲罰部隊における過酷な体験が特務曹長に対するアレックの恨みをいっそう募らせたであろうことは想像できる。)

ところがアレックはやがてこの剃ったひげを再び生やし、口髭を蓄えることになる。彼が戻ったもとの部隊はその後すぐに、アラス(Arras)——のちに第一次、第二次世界大戦の戦跡地となる——へ向かうことになっていた。ここでの激しい戦闘で結果的に戦功をあげたアレックは将校になるための学校へ行くことを(おそらく上からすすめられて)決意す

る。それを制止しようとする父親の手紙にもかかわらずアレックからはやがて勲章とともに将校の制服を着た自らの写真が送られてくる。この写真の描写には口髭への言及はないが、戦後、除隊していったん故郷へ戻ったアレックが坂道で造船所へ向かう父親と出会うときに、父親は息子の「白い髪とワックスで固めた口髭を見」(453) ることになる。アレックはおそらく将校に昇進後まもなくして口髭を蓄えるようになったのではないか。この口髭は彼にとっては将校の身分とは切っても切れない、なくてはならないものだったようである。この口髭と「地味なききちんとしたスーツ (his sober, correct suit, 431)」とステッキによっていわば身を固め、アレックは最後まで自らのステイタス (officer=gentleman) を象徴的に維持しようとする。

アレックの人生が転落へ向かって狂い始めるのは懲罰部隊からもとの部隊に戻った後の戦闘で勇ましく戦い、同時に特務曹長に復讐を果たしたときからであろう。語り手は、将校になったアレックが「ときどき自分の身の回り品のなかにある聖書に目をとめて、彼の人生がそこで変わった、ページが引きちぎられているところを開いてみた」と言い、続けてそこに書かれた文句 “...and a voice said, Peter, raise thyself kill—“ (448) を提示する。ちなみにこれは聖書占い (sortes Biblicae) というもので (Towner and Carothers 243)、偶然、開いた聖書などのページに見える一節に導きを求める占いである。もっとも、この場合 (に限らず)、聖書における元の意味は少し違うのだが、アレックはそこに特務曹長を殺せという神のお告げを聞いたのだった。アレックの特務曹長殺害の際の残酷さは、一つにはこのような権威が後ろにあるからではないかと思われる。父親のマシューもアレックのロンドン行の決意を聞いて、同じように聖書を開いている (455) ところから見れば、これはかなり一般的に行われていた慣習のように思えるが、こういった占いに易々と従ってしまうところにアレックの幼さを読み取ることができるのではないか。特務曹長殺害の際の理不尽なほどの残酷さは一つにはアレックの幼さによるものだと言うことができる。

アレックの心の中では将校の地位はジェントルマンのステイタスと結びついていたようである。そしていったん掴んだこのステイタスをアレックはどうしても離したくなかったようでもある。将校の地位は終戦とともに失うことになったが、ジェントルマンのステイタスは (かたちだけでも) なくしたくなかった。冒頭 (第一段落) のアレックの描写においてすでに見られる ‘stiff’ や ‘strained’ (431) など、こわばりや緊張を表す語彙は、ワックスで (のちには石鹸で) 固めた口髭にも象徴的なかたちで表れていると言えるが、アレックという人物を規定するひとつの顕著な性質である。戦後、カナダにわたって小麦栽培を成功させた同じ志願兵あがりの元将校のしなやかな転身ぶりとは実に対照的である。しかしそんなアレックも故郷で船大工になろうと心が動いた瞬間がなかったわけではない。終戦後、いったん故郷に戻ったアレックが朝早く生家に向かう途中、造船所へと下りてくる父親マシューと坂の途中でばったり出くわした時のことである。父親は「都会風の服を身に着け、ステッキをもった青白い、病院に入院していたような顔の背の高い男」(453) を見る。

“Alec?” he said. “Alec.” They shook hands. “I could not—I did not …” He looked at his son, at the white hair, the waxed mustaches. “You have two ribbons now for the box, you have written.” Then Matthew turned back up the hill at seven o'clock in the morning. “We’ll go to your mother.”

Then Alec Gray reverted for an instant. Perhaps he had not progressed as far as he thought, or perhaps he had been climbing a hill, and the return was not a reversion so much as something like an avalanche waiting the pebble, momentary though it was to be. “The shipyard, Father.” (453-54)

「いや、彼はもう坂を上っていて、その後戻り (return) は、逆戻り (reversion) というのではなく、(なだれが落ちるきっかけとなる) 小石を待ち受けるそのなだれのようなものであったのかもしれない」というのは、船大工の仕事に戻ろう (造船所の方へ坂を下って戻ろう) というアレックの気持ちは、彼の心の奥に潜んでいるもので、実際に行動に移されるには何らかのきっかけ (動因) を必要とするものだったということだろう。しかしそれも「ほんの瞬間」のことで、「造船所へ行こう、お父さん」という言葉がアレックの口をついて出る。しかしアレックは「それは後でいい……母さんの所へ行こう」(454) という父親の言葉にうながされて生家へ向かう。

グレイ家に戻り、家族に囲まれたアレックは父親から、母親も見たがっていたし、おまえは勇気を示して勲章を二つももらったのだから当然軍服を着て帰るべきだったということを言われる。(アレックは都会風の平服を着て帰っていた。) ところがそのあと父親は「いや、そんなことはどうでもよい、グレイ家の者にふさわしい制服は作業着にかなづちだ」と前言を無効にする。そしてアレックは父親のその言葉に「はい」と答える。前にもふれた部分である。

“Aye, sir,” Alec said, who had long since found out that no man has courage but that any man may blunder blindly into valor as one stumbles into an open manhole in the street. (454)

「はい」と答えたアレックは、「勇気のある人間などはいない、人が通りにぼっかり空いたマンホールにうっかり落ちてしまうように、誰であれ、わけもわからずつい勇敢なことをやってしまうことがあるものだとずっと前に知っていた」のであり、だからアレックは軍隊における輝かしい功績にもかかわらず、船大工に戻れという父のことばにすなおに「はい」と肯いたのだということを一応は意味するのであろう。しかし結局は、たとえ偶然にではあっても軍功をたてて将校に昇進し、残忍な人殺しをしてしまったアレックは、もうもとの素朴な船大工には戻れないのだということの意味することになる。

故郷に帰り、父と対面して一瞬、船大工に戻ることを考えたアレックであったが、その夜、家族が寝静まった後、(故郷のスコットランドではなく) イングランドに戻るつもりであることを父親に告げる。そしてそれにつけ加えて「もう少しうまくいかなければ造船所に戻ってきます」とは言うのだが、父から「船大工というものはそんなものではない」とたしなめられる。(455) ここで父親は真鍮で縁を補強した聖書を取り出して開き、そこに書かれた文字を読む。そして「おまえはロンドンへ行くんだな」と息子に向かって言い、アレックは「はい、お父さん」と答える。(455) ロンドンには軍隊で得た知己をとおして就職口が約束され、アレックが「ジェントルマン」のように務められる仕事が残っていたのである。

アレックは、現実がそうでないことを示しているのにもかかわらず、自らがその身をささげた大英帝国がいずれは自分を助けてくれるとどこかで信じていたように思える。そしてそれが、彼が船大工に戻ろうとしなかった間接的要因の一つであるようにも思える。彼はロンドンで職を得て貯金を始めるが、それは老後に備えてではなかった。

He was saving, not against old age; he believed too firmly in the Empire to do that, who had surrendered completely to the Empire like a woman, a bride. He was saving against a time when he would recross the Channel among the dead scenes of his lost and found life. (456)

アレックはあまりに固く大英帝国を信じていたから、老後に備えて貯金をするなどありえないことだったと語り手は言う。「彼は、まるで女のように、花嫁のように大英帝国にその身をすっかりゆだねてきた」のだからと。

その後、アレックはロンドンでの職を失い地方回りの仕事も経験するが、どこにいても11月11日の休戦記念日にはロンドンに戻ってきた。そして式典に参加した。「本能が、再び死んでいた彼の生の顕現、神格化の、まさにその瞬間に彼を立ち合わせるために彼を連れ戻した」(458)のである。——「再び死んでいた」というのは、戦場において彼の生は「発見されていた」(456)のであったが、戦争の終結とともにそれは再び死んでしまっていたということである。戦争の犠牲者を悼むその式典に彼は出席し、そこにおいて、戦場で「発見されていた」自らの生を確かめる。そして近衛兵 (the Household troops) や近衛連隊 (Guards)、宗教関係者や一般人などその式典に参加している多くの人々を見てアレックは明らかに励ましとちからを得ている。アレックはそのあと、なげなしの30シリングで、「戦功十字章・殊勲賞受章 陸軍大尉 A. グレイ」と印刷された、おそらく無駄に使われるであろう名刺を買い足している。

しかしもちろんアレックに大英帝国からの救いの手が差し伸べられることはなかった。彼は坂をころがるように転落し、ロンドンの通りで通行人相手にマッチを売るところまで落ちぶれる。そして、あらすじで述べたように、その姿を戦後カナダにわたって成功した戦友が目にする。久しぶりに故郷へ帰ってきたこの戦友はアレックの方に「歩み寄り、片

手を差し伸べ」るが、相手は「死んだような目で彼を見つめただけだった」。そこで戦友が「憶えてないのか」というと、「憶えている。お前はウォークレイ (Walkley) だ」と答えは返ってくるもののすぐに視線をそらされる。そこで彼はもう一度「グレイ」と呼びかけるが、アレックは「抑制されてはいるが激しいらだち」に満ちた表情で「ええい、ほっとけ、ちくしょうめ！」と応え、戦友は仕方なくその場を立ち去る。アレックはかまわず人通りの方へ向き直り「マッチ、マッチはいかがです？」とマッチを売り続ける。(463-64) このかたくなにマッチを売り続けるアレックの姿は何もしてくれない大英帝国への怒りと、そんな境遇にまで落ちぶれた自分自身に対する怒りに満ちているようである。そしてさらには、そのような落ちぶれた姿を衆目にさらすことによって大英帝国と自分自身に対して復讐をしているようにさえ見える。アレックが故郷に帰って船大工にならなかったのは、このような惨憺たる姿をさらすことによって、そうなったことへの復讐の念を晴らそうとしていたからだとさえ思える。もちろん復讐にもならない復讐なのではあるが。

この時の彼も、もちろん英国紳士をきどった服装をしていた。ステッキを携え、「アイロンがあてられたばかり」の、「擦り切れた衣服」を身に着け、「口髭は針先のように軋で固められていた」。(463) (しかし実際には服はたき火で熱した石で皺をのばされ、口髭は石鹸で固められていた。) アレックのひげは作品を通して言及がなされ、おのずと読者の注意を引く。そして単にひげそのものを越え、何らかの象徴性を帯びて機能しているように感じられるだろう。この時のアレックの口髭は言ってみればアレックがなりたかったもの、そしてなれなかったもの (ジェントルマン) を象徴している。結局アレックは大人になって、しなやかに現実に対応するということができなかった。そういう意味では、このアレックの口髭は「大人になりそこなった少年兵にとっての鎧」(梅垣 11) としての機能を果たしているとも言えるだろう。

注

1. William Faulkner, "Victory", *Collected Stories of William Faulkner*. (New York: Random House, 1950), 442. テキストからの引用はこの版による。引用ページはそれぞれの文末に示した。日本語訳は林信行訳『フォークナー全集 8 これら十三篇』(東京: 富山房、1979) を参考にした。なおスコットランド人がイングランドに対して抱えている感情については以下を参照。'Although armed Scottish resistance to English rule ended with the Battle of Culloden in 1746, many Scots maintained a fierce sense of independence from England. (Towner and Carothers 239)
2. 老アレックだけの見解ではない。最初、ドイツでもフランスでも、またイギリスにおいても戦争の指導者たちは、この戦争は短期間で決着がつくと見ていた。(飯倉 41)

引用参考文献

Blotner, Joseph. *Faulkner: A Biography*. 2 Vols. New York: Random House, 1974.

- . *Faulkner: A Biography*. One-volume Edition. New York: Random House, 1984.
- Bradford, M. E. "The Anomaly of Faulkner's World War I Stories." *Mississippi Quarterly* 36.3 (1983): 243-62.
- Day, Douglas. "The War Stories of William Faulkner." *Georgia Review* 15 (1961): 385-94.
- Faulkner, William. "Victory." *Collected Stories of William Faulkner*. New York: Random House, 1950. 431-64.
- . *Selected Letters of William Faulkner*. Ed. Joseph Blotner. New York: Random House, 1977.
- . *William Faulkner Manuscripts 9: These 13*. Ed. Noel Polk. New York: Garland, 1987.
- Ferguson, James. *Faulkner's Short Fiction*. Knoxville: University of Texas Press, 1991.
- Hook, Andrew. "Faulkner and Sassoon." *Notes and Queries* 41.3 (1994): 377-78.
- Skei, Hans H. *William Faulkner: The Short Story Career*. Oslo, Norway: Universitetsforlaget, 1981.
- . *Reading William Faulkner's Best Short Stories*. Columbia: South Carolina U. P., 1999.
- Smith, Raleigh W. "Faulkner's 'Victory': The Plain People of Clydebank," *Mississippi Quarterly* 23 (1970): 241-49.
- Towner, M. Teresa and James B. Carothers. *Reading Faulkner: Collected Stories*. Jackson: U.P. of Mississippi, 2006.
- Volpe, Edmond L. *A Reader's Guide to William Faulkner: The Short Stories*. New York, Syracuse U. P., 2004.
- 飯倉 章『第一次世界大戦史——風刺画とともに見る指導者たち』東京：中央公論新社，2016.
- 梅垣 昌子「ウィリアム・フォークナーの『勝利』——その裏側の真実」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』33 (2007): 1-17.
- 小山 敏夫『ウィリアム・フォークナーの短篇の世界』京都：山口書店，1988.
- 花岡 秀『ウィリアム・フォークナー短篇集——空間構造をめぐって』京都：山口書店，1994.